

2025年度 一般選抜問題  
後期日程 2025年3月10日(月)

選 択 科 目  
(数学・国語・論文総合)

数 学	……………	1～6 ページ
国 語	……………	7～21 ページ
論 文 総 合	……………	23 ページ

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 3科目型の受験生および3科目型と2科目型を併願する受験生は上記から2科目を、2科目型の受験生は、上記科目と英語から2科目選択してください。但し受験票に記載された科目以外を受験すると0点となります。
3. 解答用紙には、「**数学**」(青色)と「**英語・国語**」(赤色)、「**論文総合**」(記述式)の3種類があります。
4. 試験開始後、解答用紙に受験番号と名前を必ず記入してください。
5. マークシート用紙には受験番号をマークしてください。英語、国語については、解答する科目を一つ選び、科目の右にマークしてください。また解答科目欄に科目名を記入してください。正しくマークされていない場合または複数の科目にマークされている場合は0点となります。
6. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
7. 問題用紙の余白は計算に使用してもかまいませんが、解答用紙を汚してはいけません。
8. 試験開始後、問題用紙・解答用紙に落丁・損傷がないか確認してください。
9. 数学の問題の冒頭には「**解答上の注意**」が記入されていますので、必ず読んでから解答してください。
10. 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

# 国語

1 次の問い（問1～4）に答えなさい。

問1 ア～エの傍線部のカタカナに相当する漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

1

2

3

4

ア 国の未来は若い世代のソウケンにかかっている。

1

- ① 無駄な支出を減らしてケンヤクに努める。
- ② 竜巻の被災地に救助隊をハケンする。
- ③ 先進諸国にヒケンする経済力を誇る。
- ④ 与えられた課題にシンケンに取り組む。

イ 法律にテイシヨクする行為をとがめる。

2

- ① 最後まで首相のシヨクセキを果たす。
- ② 市のシヨクタクの事務員として働く。
- ③ 外来種のハンシヨクの防止に努める。
- ④ 順調に進んだというカンシヨクを得た。

ウ キトクの知らせを受け、病院にかけつける。

3

- ① 忠・孝などの伝統的なトクモクを重視する。
- ② ウェブ上でのトクメイによる批判は下品な行為だ。
- ③ 失敗をした部下を上司がトクレイする。
- ④ ジュウトクな患者が緊急搬送される。

エ 指揮官の判断の誤りでジンダイな被害を受ける。

4

- ① 受けた厚意に対しシンジンなる謝意を表す。
- ② チームのジンヨウを一新して雰囲気を変える。
- ③ ジンジョウでない方法をとって解決をはかる。
- ④ ジンソクな対応により被災者から感謝される。

問2 ア・イの四字熟語の空欄 5、6 に入る漢字を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 群雄割 5

- ① 居 ② 抛 ③ 去 ④ 拒

イ 巧言 6 色

- ① 冷 ② 麗 ③ 札 ④ 令

問3 ア～ウの慣用表現の空欄 7、8、9 に入る漢字を、次の①～⑨の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 7 貨居くべし

イ 寧ろ鶏 8 となるも牛後となる無かれ

ウ 間 9 に合わない

- ① 号 ② 尺 ③ 際 ④ 貴 ⑤ 奇  
⑥ 頭 ⑦ 鳴 ⑧ 機 ⑨ 口

問4 ア～ウに該当するものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

10、11、12

ア 自由律俳句の代表として尾崎放哉と並び称される俳人 10

- ① 種田山頭火 ② 河東碧梧桐 ③ 中塚一碧楼 ④ 正岡子規

イ 川端康成の著作 11

- ① 『破船』 ② 『友情』 ③ 『古都』 ④ 『恩讐の彼方に』

ウ 池澤夏樹の著作 12

- ① 『パーク・ライフ』 ② 『海辺のカフカ』  
③ 『スタイル・ライフ』 ④ 『ブラフマンの埋葬』

## 2

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

A 日本における公と私は、ヨーロッパにおけるほどはつきりと二つの原理の対立という形をとっていませんが、ここまで見てきたことに照らして、また新しくいくつかのことを考えさせます。僕に意味深く思われるのは、B 日本における公と私についての考察の文脈が、大きく歴史学と民俗学の間で分裂していることと見えることです。具体的にいえば、この主題に関する日本の歴史学的な考察は、この対概念を主に漢字で書かれた公と私の問題として扱いますが、そうするとその考察は、主にオオヤケ（公）を中心に見ていかれることとなります。これに対して、民俗学のほうからの考察は、これをワタクシとオオヤケという民俗語のほうから見てゆくのですが、そうすると、その考察は、主にワタクシ（私）を中心とした考察となります。

このことは、ヨーロッパにおける「私的なもの」が本来「公的な性格を奪われている」という他律的な概念でありながら、他方で、その概念構成のうちにポリスの複数性の地上部分に対してのオイコスの「人間の本性」の単一性に根ざした地下部分という自律的な原理をもっていたことと比較可能です。歴史学の方から見てゆくと、日本の私は、「公的でないもの」という他律的な概念と見えるのですが、民俗学の方から見てゆくと「私」とは「公」との関係以前にある実質をもつ自律的な概念なのです。

まず、歴史学の方から見てゆきましょう。それによると、日本の古代にあったのは、オオヤケという言葉と考え方です。それは当時の社会の基礎単位だった農業共同体の中核的な施設である「ヤケ」という言葉からきています。「ヤケ」の中でも第一等のものが「オオヤケ」と呼ばれ、そこに住む共同体の首長と彼の代表する共同性が、ともにこの言葉で指示されていました。

日本における公私の考え方は、歴史の表舞台からこれを見ると、このオオヤケが中国の「公」と似ていることから、この言葉に「公」の漢字をあて、中国の公私という対概念を導入することで作られてゆきます。I、日本にはオオヤケという概念があり、それと別個にワタクシという概念があるのですが、そこに中国から公私という観念が入ってきたことがきっかけになって、いわばそのうちのオオヤケを中心に、「オオヤケ」と「そうでないもの」という意味で、いわば義歯でいうブリッジの形で、オオヤケとワタクシという一对の考え方が生まれることになるのです。

その中国でも公私は、もとは対立概念ではなかったようです。それが『荀子』あたりから対概念となり、それをさらに『韓非子』の著者が「ム（わたくし）に背くを公と為す」という形で対立概念に作りあげ、いまに続く公私観念の基礎ができたとのことです。

ですから、日本の古代の書かれた史料に現れてくるのは、まず「公」という漢字であり、それは「オオヤケ」とよまれます。「オオヤケ」は、共同体の首長と彼の代表する共同性と、両方の意味をもっていました。

これに対し、民俗学では、この主題に次のような接近を見せることになります。それによると、日本語のワタクシという言葉と考え方の出所は、古来この列島に住んできた住民の生活の底辺に求められます。日本の民俗世界に伝わる言葉を集めた『総合日本民俗語彙』によると、ワタクシとは「女にとつて許された最小限度の財産」の意味で、II 沖縄ではそれはワタクサーといい、奄美群島の沖永良部島ではワタクシと発音し、ともに「女性が所有する金銭、不動産、牛、羊など」を意味しました。その考え方の起源にあるのは、「女性の貯え」や「私物を入れておく器物」で、その代表的なものは、麻を積んで入れておく「オゴケ（芋桶）」と呼ばれる小さな容器物でした。

そこにだけ、日本の暮らしの中でプライベートアシーをもたない嫁にきた女性の「自分に自由になる空間」がありました。この「親密な空間」は、パブリックな空間を前提にいませんから、分岐さ

れた等質空間であるより、そもそも異質な空間であることでこの個別性を獲得していたと見られます。麻を積むことで得られる金銭は女性の自由になるヘソクリで、この女性の「秘函」は、誰も触つてはいけない霊力あるものと信じられていました。

倉田一郎によると、芝居の十八番は他人の追隨を許さない得意の技芸をさしますが、これを「オハコ」と呼ぶのはこの小箱のことだということです。この倉田はまたたいへん興味深い話も伝えていきます。彼によれば、江戸時代、島津氏が琉球に侵攻した際、沖縄人は姉妹のもつ苧績籠を戦いの前線に並べたそうです。女性の苧績籠には霊力があつて、その上を飛び越えることはできないという信仰があつたからです。

Ⅲ、島津の兵隊はあつというまにこの苧績籠の列を越えて琉球を蹂躪したことはいうまでもありません。でも、これらの話は、日本においても、ワタクシというものが、単にオオヤケでないもの、というのとは違ふ、あの神の掟に通じる別種の原理に基づいている可能性を示唆しています。

古代ギリシャが「ポリス」という都市と「オイコス」という家の対立を基礎に公私という観念を育てたとすると、古代から中世にかけての日本の公私は、この「ヤケ」（農業中核施設）と「オゴケ」を原基に、見えない一對として存在していました。

日本における歴史の表舞台での公と私の考えられ方を見ると、ここにあのタテマエとホンネというあり方の原型があるという気持ちにさせられます。

タテマエとホンネだけでなく、オモテとウラ、ウチとソトと、本来の言い方と区別してカタカナでいうほうがよいような、あの戦後的なあり方全般の原型が、ここにあるように見えてくるから不思議です。

その理由ははっきりしています。そもそも表と裏という対概念はもとの形を顔と心にとつており、その感覚的な原基は身体です。また、内と外という対概念の原型はいうまでもなく家でしょう。身体と家の感覚は、世の中がどのようなであれ、それほど変わりません。ですから長い間、それは、相対的ではない絶対的な対概念だったので。

これに対し、公と私は、その意味では建前と本音と同じく、少なくとも日本では本来的な対概念ではなく、独立した二つの概念が後に一對にされたものだというほかに、その原基を国におく概念でした。

たぶんそこに、日本に古来ある対概念のうち、この公と私だけが当初から、現在のタテマエとホンネに通じるあの「入れ替わり」可能な相対性を帯びた概念となつた理由があります。そこにあのタテマエとホンネに通じるニヒリズムめいた契機があるのかどうかは、後、この本の最後に考えます。

ただ、こう考えてきて興味深いのは、身体、家という確固とした足場から生まれた表と裏、内と外という対概念が、戦後になってそれぞれオモテとウラ、ウチとソトと片仮名で表記したほうがよいあの相対性の概念に変質したことでしょう。ここにあのタテマエとホンネのような事情を想定できないとしたら、これらは何を語るのでしょうか。

僕は、ここに戦後社会のもう一つの見えない崩壊、つまり、家の感覚、身体感覚のおだやかな喪失が、姿を見せていると感じます。

いずれにしても、この当初から「入れ替わり」可能な相対性をもつ対概念として現れたところこの日本における公私概念の特徴があります。いまでは、タテマエとホンネをはじめ、オモテとウラ、ウチとソトと、多くの対概念がその程度に差こそあれ、相対化しつつあります。公と私という概念は、日本にあつて、古代以来、その「入れ替わり」性の原型を提供してきたとも見えてくるのです。

（加藤典洋『増補改訂 日本の無思想』による。なお、本文中に一部省略したところがある。）

問1 空欄   に入る表現の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① I なぜなら                    II かりに                    III そもそも
- ② I そして                    II しかし                    III したがって
- ③ I つまり                    II たとえば                    III むろん
- ④ I あるいは                    II 現に                    III ところが
- ⑤ I 要するに                    II ときに                    III だから

問2 傍線部A「日本における公と私は、ヨーロッパにおけるほどはつきりと二つの原理の対立という形をとっていません」とあるが、「日本における公私の考え方」とその基礎になるものを、ヨーロッパと比較して次の〈表〉のようにまとめた。〈表〉の中の空欄  ・  に入る表現として最も適当なものを、後の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

・

〈表〉

		ヨーロッパ	日本
公	「ポリス」という都市		「ヤケ」という農業中核施設
私	「オイコス」という家		「オゴケ」という <input type="text" value="X"/>
公私	<input type="text" value="Y"/>		「ヤケ」と「オゴケ」を原基とした、見えない一対

空欄

- ① 霊力のある芋績籠
- ② 麻を積んで入れておく容器
- ③ 「オハコ」と呼ばれる「秘函」
- ④ 麻を積むことで得られる金銭

空欄

- ① 社会という表面を表す「公」と、公的な性格を排除した私的な空間という裏面を表す「私」という対立概念
- ② 社会という「タテマエ」を表す「公」と、「人間の本性」という「ホンネ」を表す「私」という対立概念
- ③ 「パブリックなもの」という意味の「公」と、「プライベート」という意味の「私」という対立概念
- ④ 古代ギリシヤの「民衆が集まる都市」と「家族が集まる家」との対立を基礎に育った対

立概念

問3

傍線部B「日本における公と私についての考察の文脈が、大きく歴史学と民俗学の間で分裂している」とあるが、これはどういうことか。その説明として**適当でないもの**を次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

16

- ① 歴史学では、共同体の首長と、彼の代表する共同性である「オホヤケ」という言葉が基底にあるが、民俗学では、「女にとつて許された最小限度の財産」をさす「ワタクシ」という言葉が基底にあるということ。
- ② 歴史学では、オオヤケという概念に「公」の漢字をあて、公私という対概念でとらえるが、民俗学では、「ワタクシ」をパブリックな空間を前提にしない「自分に自由になる空間」としてとらえるということ。
- ③ 歴史学では、漢字で書かれた「公」と「私」の問題として、「オオヤケ」を中心に考察するが、民俗学では、「ワタクシ」と「オオヤケ」という民俗語の問題として、「ワタクシ」を中心に考察するということ。
- ④ 歴史学では、「私」を「公的な性格をもたないもの」という「公」の対立概念として見なしているが、民俗学では、「私」を「公」とはかかわりなく、それ自身で実質をもつ概念と見なしているということ。
- ⑤ 歴史学では、「オホヤケ」と「ワタクシ」を漢字で書かれた「公」と「私」の問題として取り扱うが、民俗学では、「オホヤケ」と「そうでないもの」という意味として、住民の生活の底辺に出所を求めるということ。

問4

傍線部C「タテマエとホンネというあり方の原型」とあるが、これはどういう概念か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

17

- ① もとの形を顔と心にとる表と裏という絶対的な対概念。
- ② 建前と本音と同じく、その原基を国におく概念。
- ③ オモテとウラ、ウチとソトと片仮名で表記したほうがよい相対性の概念。
- ④ 家という確固とした足場から生まれた内と外という絶対的な対概念。
- ⑤ 公と私という「入れ替わり」可能な相対性を帯びた対概念。

## 問5

傍線部D「現在のタテマエとホンネ」とあるが、これについて筆者は、本文と同じ出典の中で「ホンネの底にあるもの」という小見出しのもと、別の学者・増原良彦（増原はらよしひこ）の説明を引用しながら次の〈資料〉のように述べている。ある高校生は、本文とこの〈資料〉を踏まえて後の〈ノート〉をまとめた。〈ノート〉の空欄 Z に入る表現として最も適当なものを、後の①～⑤の中から一つ選びなさい。

18

〈資料〉

これについて、増原が、面白い話を書いています。  
こんな話です。

ある小さな団体が、毎年一人を選んで「賞」を出していましたが、その「賞」自体があまりマスコミに取りあげられません。ある年、「賞」をマスコミに宣伝するため、「今年は一いつ、有名人を選ぼう」という提案がなされ、承認されます。しかし、具体的に受賞者の選考に入ったところで、「タテマエとホンネ」に関し、議論がわかれます。

二つの意見は、次の通りでした。

第一の説は、〈タテマエ……立派な人（賞にふさわしい人）を表彰する、ホンネ……有名人を表彰したい〉。第二の説は〈タテマエ……有名人を表彰する、ホンネ……立派な人（賞にふさわしい人）を表彰したい〉。

第一の説は、対外的には賞にふさわしい人を選んだことにするけれども、内部的には有名人を選ぶとするもの、第二の説は、選考委員会の申し合わせとしては有名人を選ぶのがタテマエだが、でもそのタテマエの範囲内で、やはりふさわしい人を選びたい、と委員の誰彼が内心で思う、というケースです。

ところで、増原は、こう述べた後、こう考えてくると、次のような第三の説すら、成立可能なんじゃないだろうか、というのです。

つまり、第三の説は、〈タテマエ1……立派な人を選びたい、タテマエ2……有名人を選びたい、ホンネ……どっちだっていいや〉。

だいぶ無責任な考え方だといわれそうだけれども、この第三の説では、「どっちだっていいや」という投げやりなホンネがあるため、さまざまタテマエ（とってつけたような理由）が出てくると考えるのだ、というのです。

〈ノート〉

〈資料〉から読み取ったこと

ある小さな団体で出している「賞」をマスコミに宣伝するため、団体内では「有名人を選ぼう」ということになり、受賞者の具体的な選考に入ったところ、「タテマエとホンネ」に関し、議論がわかれた。

● 第一の説 タテマエ……賞にふさわしい人を表彰する

ホンネ……有名人を表彰したい

● 第二の説 タテマエ……有名人を表彰する

ホンネ……賞にふさわしい人を表彰したい

● 第三の説 タテマエ……立派な人を選びたい／有名人を選びたい

ホンネ……どっちだっていいや

### 私の考察

第一の説と第二の説では、タテマエとホンネとが入れ替わっている。二つの説の出所を推測すると、第一の説は、対外的な効果をねらう役員会などの心情を表すもので、第二の説は、具体的に選考を行う人々の心情を表すものではないか。これらは「入れ替わり」可能な相対性を帯びたものである。しかし、第三の説は、タテマエとホンネが入れ替わることがない。そのことを思うと、もしかしたら第一の説と第二の説を入れ替わり可能であるのは、**Z** ためかもしれない。

- ① 同じ人物でも立場が変われば意見が変わるという定見のなさが日本人の性質である
- ② その場にふさわしい発言をしなければならないという集団心理が無意識のうちに働く
- ③ 有名人を表彰するという提案自体が、「賞」のコンセプトにそぐわないものである
- ④ 双方の底辺に「どっちだっていい」というニヒリズムめいたものが共通してある
- ⑤ そもそもタテマエとホンネが、どちらも本心に起因する表裏一体のものである

### 問6

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

19

- ① 中国でも、公私という対概念はもともとあったものではなく、『荀子』や、『韓非子』などの著作にみられる「私」よりも「公」を優先する思想によつて、対立概念に作りあげられたものである。
- ② ヨーロッパにおいて「公」「私」は対立する概念だが、日本における「公」「私」の基準は、私的なものから公的なものへと、公的な度合いが高まっていくにつれて価値も高まる序列の中で決まる。
- ③ 日本において「ワタクシ」という言葉は、女性には霊力があるとする土着の信仰と結びついており、他の地域の人間にとっては何の意味もない「オホヤケ」とは別種の原理によるものであった。
- ④ 家父長制度が崩れ、核家族化して「家」という確固たる基盤を失い、高度成長に伴う生活の変化で身体感覚も失ったことで、表と裏、内と外という絶対的な対概念が、相対性の概念に変質した。
- ⑤ 日本では「建前と本音」、「表と裏」「内と外」を分けて考える傾向があり、それを揶揄する思いから、「タテマエとホンネ」、「オモテとウラ」、「ウチとソト」とカタカナで表記されるようになった。

3

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

瀬戸内海の五木島にある愛媛県立越智高校五木分校の文芸部に属する小市航太、村上恵一、河野日向子、来島京、斎和彦らは、俳句甲子園に挑んだ。来島京は優秀な兄・正人にばかり期待を寄せる親に反発し、祖父の家で暮らしている。五木分校のチームは予選で敗退したが、正人、静香らが率いる道後高校Aチームは予選を勝ち抜いており、準決勝第一試合が始まろうとしている。

準決勝第一試合。

赤、菱沼学院高等学校（北海道）対、白、道後高等学校Aチーム（愛媛）。

さつき航太たちが鑑賞した道後の句が次々と発表されていく。

道後の句を見た時は、やっぱりうまいと感心した。だが、ステージ上では接戦が繰り返された。相手チームの句もいい。

結局、二対二で大将戦を迎えることになった。

正人さんが披講したがった大将戦の句だ。

「大将戦は来島部長の句なの？」

「はい」

和彦と松井君がささやきあっている。

まず、赤チーム菱沼学院の披講。

（赤） 街が光る！ 雪が雨に変わる朝

発表したのは、ショートカットの女の子だった。

その子の声のせいもあるけど、句全体が I ように聞こえる。

北海道の高校生が詠んだ、「雪が雨に変わる朝」という句。

雪の季節がやっと終わる情景なのだ。その朝の光はきつと、とてもきれいなのだろう……。続いて、白チームから正人さんが立ち上がった。

その句。

（白） 泣きやまぬ妹と居る蟬時雨

航太の隣で、大きく息を吸い込む音が聞こえた。

京だ。

<sup>A</sup> 目をこれ以上できないほど大きく見開いて、両手を口に当てている。

その手を離したら、何か叫び出してしまいそうだとでもいうように。

来島正人が妹と詠んでいるのだから、つまり、これは、はつきりと、京を詠んだ句なのだ。

そう言えば、来島正人は、さつき、大将戦の句をしきりに発表したがつっていた。あれは、航太たちというより、京に見せたかったのかもしれない。この句を。

ステージ上ではすでに質疑が始まっていた。

「赤の句、情景はよくわかります。ですが、上五？ 上六？ のあとの『！』マークは必要でしょうか。効果がよくわかりません」

静香さんのその質問に勢いよく手を挙げ、元気に立ち上がったのは、披講した女子だった。

「私たちの住むところは長い冬の間中、雪に閉ざされます。ですが、やっとその冬が終わりかけた頃、決まって強い西風が吹きます。その風は暖かくて、雪雲を吹き払ってくれるんです。だからそういう時の空には、冬の分厚い雪雲じゃなくて、切れ切れの、薄くなって青空ものぞかせそうな、そんな雲が浮かんでいます。西風が吹いて雪が雨に変わったその朝、雲の切れ間から太陽が街を光らせる、その時の嬉しさは、本当に『!』をいくつつけても足りないくらいの、それほど強いものなんです!」

航太は、積もるほどの雪を見た記憶がない。もともと瀬戸内は冬ミカンが名産品であるほどの、暖かい地方だ。たまにちらつく雪はあっても、翌日まで持ち越すことさえ、ほとんどない。

雪に閉じ込められた冬が終わる、その春の兆しの嬉しさは、きつと、航太には想像もできないくらい大きいものなのだろう。

だが、道後Aは **II** 攻める。

「ですから、その嬉しさはわかります。でも、もともと、『朝』のイメージには昇り始めた太陽の光、明るさ、そういうものがありますよね? 『朝』と『光る』、この両方を句に取り入れるのは、やはりイメージが重なってもつたない気がします」

その質問に何とか答えた赤チームに対して、別の道後Aの選手がさらに質問。

「私が気になったのも、やはり『街が光る!』の部分です。六文字の破調の句にしたり『!』をつけたりしなくても、なだらかに『光る街』と始める句で、冬が終わって春がやってくる、その嬉しさは充分表現できたと思います」

そこで時間切れとなった。次に、赤チームから白チームへ質問。

「この句、泣きやまない妹のその泣き声は、蟬時雨の蟬の音が重なって聞こえないと思うのですが、声も聞こえないけれど泣き続ける妹、そういう情景を詠んだものなのでしょうか?」

正人さんが立ち上がった。

「この句は、ぼくの実験です」

京が、また声にならない声を立てた。

もちろん、京の様子が正人さんにわかるはずもない。

「虫嫌いのまだ小さい妹が、家の中に迷い込んだ蟬を外に捨てなければならなくなって、蟬を掌に載せて外へ出て行った。気づいたぼくが妹を追いかけると、そこは、うるさいくらいに蟬の鳴き声が降ってくる、そんな景色の中でした。蟬の声に掻き消されそうだけど妹の泣き声もやはりそこにある。どちらもやまない。ぼくには、それをどうすることもできなかった。ただ、おろおろして、妹を泣きやませることもできなくて、ぼうっと突っ立っている。その **III** に、蟬の鳴き声がさらにのしかかる。そのせつなさを詠んだ句です」

航太の反対側の隣から、日向子が京の腕をつかんだのがわかった。

「京! この句、京の句への答礼句じゃない?」

京がぼんやりした顔のまま、繰り返す。

「どうれいく……?」

「ほかの人が詠んだ俳句へ、俳句で返事することよ! だって、京、あなた、『掌にもがく蟬』と詠んだじゃない!」

「そうだ……!」

航太もはつきりと思いついた。

地方大会、「蟬」の兼題に対して京が詠んだ句のことを。

掌にもがく蟬や言葉だけの故郷

京は言っていた。これは、感情の処理もできなかった、つらい子どもの頃の記憶を詠んだ句だと。家の中に迷い込んできたまま、弱って逃げられずにもがいていた蟬。小さかった京はその蟬におびえて泣き出してしまい、兄の勉強の邪魔になると母親に怒られて、その弱った蟬を掌に握らされ、外へ捨てて来いと命じられたそうだ……。

航太には、もう一つ、思い出せたことがあった。

「京、あの京の句は、六月の地方大会の、大将戦の句だったよな？　それで、あの時、観客席にはたしかに正人さんがいたじゃないか！」

「まさか……。お兄ちゃんが、あの私の句をきちんと受け取ってくれた……？」

「そうだよ！　だって、準決勝戦のこの『雨』の句、作ったのは地方大会のあとだから！」

説明のできない興奮に、五木分校の五人は包まれていた。

だがその時、行司の声が響き渡る。

「そこまで！」

大将戦の、ディベート時間終了だ。

「さあ、準決勝第一試合、ここまで二勝二敗の成績で迎えた大将戦です。泣いても笑っても、この大将戦を制したチームが決勝戦に進みます。審査員の先生方、旗のご用意をお願いします」

ホール内が静まり返る。

「それでは、判定！」

その声と同時に、横一列に並んだ十三本の旗が一斉に揚がった。

どっちが多い……？

「白、白が多いよね？」

上ずった声で日向子がつぶやく。昨日までは五人だった審査員が十三人に増えたので、一目見ただけでははつきりと数が把握できないのだ。

だがその瞬間、航太は肩をつかまれた。

「大丈夫だ、白、勝った！　旗が七本、揚がっている！」

恵一が大声を出した。同時に、その声よりも大きなどよめきが、周囲からも上がっている。

その中で、司会の声がひととき大きく響いた。

「赤六本、白七本！　接戦を制して決勝に進んだのは、地元愛媛の道後高校Aチームです！」

京が、両手で顔を覆った。

正人さんは、真っ先に観客席に戻ってきた。迎える道後高校の後輩たちとハイタッチをしたあと、すでに席を譲ろうと立ち上がっていた五木分校の五人に、いや、京に、目を合わせる。

「おめでとう」

京は赤い目をして、でもはつきりと兄にお祝いを言った。

「あの句、どうだった？」

「嬉しかった」

京は小学生のように単純に答えている。兄のほうが複雑な表情だ。

「地方大会で、京の、あの蟬の句を聞いた。『掌にもがく蟬』。京が詠んだらしいけど、虫嫌いの京が蟬をつかむなんて、そんなことあるだろうか。そうやって考えているうちに、いきなり思い出したん

だ。あのやりきれないほどうるさい蟬の声の中で泣いていた京を。……それまでずっと忘れていたのに。ごめん」

京はちよつと笑った。

「私なんか、忘れるも何も、今まで知らなかったよ。お兄ちゃんが、私を追いかけてきてくれていたってこと。お兄ちゃんは、ちゃんと私のことを心配してくれていたんだね。そんなの一度も考えたことなかった。私、自分のことで精一杯で、自分は世界一かわいいそうな子だって、ずっとそんなことばっかり思っていたから」

C 正人さんは目のやり場に困ったようにうつむいた。

「おれがもつといい兄ちゃんだったらよかつたのかな……」

「私のほうこそ、かわいくない妹だから。いつもお兄ちゃんに当たり散らしてたよね。お兄ちゃんばかりお母さんにかわいがってもらってずるいつて。お兄ちゃんのせいじゃないのに、お兄ちゃんが、頭がよくて何でもできるだけなのに」

「そんなこと……」

正人さんは頭に手をやってから、ふと、周りを見回した。自分と妹を囲んでいる両校生徒に注目されているのに、やっと気がついたようだ。

「京、また話、しような」

(森谷明子『南風吹く』<sup>みなみ</sup>による。)

(注) 松井君——道後高校の生徒。来島正人の後輩。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。 20、21、22

(ア) 兆し

20

① 合図  
② 表れ  
③ 徴候  
④ 到来  
⑤ 暗示

(イ) なららかに

21

① 自然に  
② 平坦にへいたん  
③ 精緻に  
④ 流暢にりゅうちやう  
⑤ 簡単に

(ウ) おろおろして

22

① おびえて  
② うろたえて  
③ びっくりして  
④ あれこれ試そうとして  
⑤ 息を殺して

問2 空欄Ⅰ～Ⅲに入る表現の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 23

①	Ⅰ 大げさな	Ⅱ おだやかに	Ⅲ いまいましき
②	Ⅰ 躍動している	Ⅱ 果敢に	Ⅲ あじけなさ
③	Ⅰ 光っている	Ⅱ ひややかに	Ⅲ 腹立たしさ
④	Ⅰ しまっている	Ⅱ 不愛想に	Ⅲ はずかしさ
⑤	Ⅰ 弾んでいる	Ⅱ 冷静に	Ⅲ やり切れなさ

### 問3

傍線部A「目をこれ以上できないほど大きく見開いて、両手を口に当てている。」とあるが、この時の京の様子を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

24

- ① 「妹」という言葉から、兄が俳句に詠んだのは自分のことであるとわかり、まさか自分を句に詠まれるとは思わなかったため、思いもかけないことで驚いている。
- ② 「妹」と「蟬時雨」について詠んだ兄の句を耳にして、自分が避けていた兄が自分の泣いているときの句を詠んだことに嫌悪感を抱き、逃げ出したくなっている。
- ③ 兄がしきりに発表したがっていた大将戦の句が、自分のことを詠んだものだったとわかり、あのと聞き聞いてあげればよかったと、後悔の念を抱いている。
- ④ 準決勝という、優勝を目前にした大事な試合の席で、兄が自分のことを詠んだ句を発表したことに對して、嬉しいと思う反面、試合の結果が気になっている。
- ⑤ 「泣きやまぬ妹」と詠んだ兄の句を耳にした瞬間、自分のことを詠んでいるうえにその出来栄えが見事に思え、嬉しくて思わず涙が出そうになっている。

### 問4

傍線部B「まさか……。お兄ちゃんが、あの私の句をきちんと受け取ってくれた……？」とあるが、この時の京の心情を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

25

- ① 兄だけが母にかわいがられていると感じてひがんでいたが、兄が自分に目を向けてくれていると実感したことで、兄との間にあったわだかまりがすっかり消えている。
- ② 妹である自分が、地方大会の日に観客席に兄がいたことに気づかなかつたのに、他人である航太が覚えており気にかけてくれたことに對して、自分のうかつさを責めている。
- ③ 俳句甲子園という大舞台で自分が詠んだ句に兄が返事をしてくれたことから、兄が自分に関心を示すことはないという考えが間違いだつたかもしれないと思い始めている。
- ④ 自分が詠んだ句を受けて、同じ日のことを兄が詠んだ句が、自分のことを思う気持ちに満ちていたため、自分に対する兄の愛情に気づいて感動で胸がいっぱいになっている。
- ⑤ 子どもの頃のつらいできごとを兄が覚えてくれていただけではなく、自分に対して答礼句まで詠んでくれたことから、兄と自分の不仲が解消したことを心から喜んでいる。

問5 傍線部C「正人さんは目のやり場に困ったようにうつむいた。」とあるが、正人はなぜうつむいたのか。その理由を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

26

- ① 「掌にもぐく蟬」という京の句を聞いてもしばらくその当時のことが思い出せなかったことが情けなく、それでも「お兄ちゃんはやんと私のことを心配してくれていた」と言ってくれる京に、合わせる顔がなかったから。
- ② 蟬時雨の中で泣いていた京に声をかけることも、その代わりに蟬を捨てて京を助けることもできなかった自分を、京が遠回しに批判していると感じられて、京の顔をまともに見ることができないほど動揺してしまったから。
- ③ 「自分は世界一かわいいそうな子」だと思ひ込んでいたという京の言葉に、親に一方的な期待をかけられる自分の方も決してしあわせではなかったと反論したいが、京の気持ちも理解できて同情する気持ちがわいてきたから。
- ④ 兄が心配してくれていたとは一度も考えたことがなかったという京の言葉に、自分も一度も言葉や態度で気持ちを伝えたことがなく、兄として誇れるような人間ではないと思ひ、申し訳ない気持ちになったから。
- ⑤ 京が蟬時雨の中で泣いていたあの日、虫が嫌いな小さな妹のことが心配で追いかけていたのに、今まで知らなかったと言われたことで、自分の気持ちがまったく伝わっていないことがわかったとわかって、残念な気持ちになったから。

問6 本文の内容や表現の特徴を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

27

- ① 俳句甲子園のステージ上の白熱したやりとりと、それを見守る観客席の様子を交互に描写し、同じ愛媛代表のチームを応援する五人の様子を描いている。
- ② 真摯に俳句に取り組む高校生が議論し合う様子を描きながら、別々に暮らす兄妹が俳句を通して心を通じ合わせていく様を、航太の視点から描いている。
- ③ 俳句甲子園における質疑応答の場面で、兄妹によってひそかに俳句のやりとりが行われていたことを、短文と比喩を多用してドラマチックに描いている。
- ④ 準決勝進出校同士による、高校生といえどもレベルの高い俳句の鑑賞を通して、俳句の世界に魅せられた若者たちの心温まる交流の様子が描かれている。
- ⑤ 大將戦の句について、ダイアログ形式で両校が互いの句を鑑賞する様子を描く中で、その中の一句が航太の心情を変えていく劇的なシーンが描かれている。

(このページは、空白である。)